2012 年　3 月 24 日・「図書新聞」では

三〇〇年前、放牛さんが作り続けた地蔵さま

『放牛さんとへふり地蔵』文：正田吉男　絵：杉山静香・上原恵

〈むかし、熊本城下の古大工町に、放牛という坊さんが住んでいた。坊さんといっても、お寺ももたず、おすもうさんのような大きな体をもてあまし、いつもはだかでいるような、まずしいくらしだった〉と、この絵本ははじまる。折しも、水飢饉。去年も今年もひどいひでりだ。水がなければ、人は生きられない。金峰山のふもとの、鎌研坂の上の村から、この牧牛さんに地蔵をつくって欲しいと依頼があった。よしわかった、と承諾したものの、次の満月の日まで十日しかない。地蔵真言をとなえながらノミとトンカチをふるって懸命に石に地蔵の姿を彫り続け、やっと間に合った。

今から三〇〇年むかし、享保時代の十一年間に、一一八体余りの石仏を建てた、という。現在でも一〇〇体ほどの石仏が熊本県内のあちこちにまつられている。放牛地蔵と呼ばれているが、実際には地蔵菩薩だけではなく、観音菩薩、菩薩如来、釈迦如来、阿弥陀如来像などがある。

石仏には必ず「他力　願主　放牛」の文字とともに建立の年月日と「〇〇体目」という番号が大きく彫られているという。そして最後の番号が一〇七体目という記述で終わっている。しかし、最初の地蔵には番号がなく、三〇体目、四〇体目がなぜか二つある。更に年号と番号のないものも見つかっていて、なぜ一〇七の番号で終わっているのか、と著者である「放牛石仏研究会」代表の正田吉男氏は問うている。多分、いくら彫っても鎮めきれなかった自分の煩悩を、自分が一〇八体目の地蔵になることを願って作為したものと思われる。

巻末には〈放牛地蔵巡礼マップ〉が付けられている。童話自体は子供が読んで楽しめるようになっているが、大人が、何も四国巡礼や秩父巡礼に行かなくてもいい。日曜ごとに地元、足元の気軽な散策に誘って心躍る。一週間の余暇があれば熊本に旅をして、一つ一つの石仏に対面してみたい。僧・放牛の他力の意味の一端が解るかもしれない。

と紹介されています。